



TITLE:

星の文藝欄

AUTHOR(S):

---

CITATION:

星の文藝欄. 天界 1935, 15(172): 390-391

ISSUE DATE:

1935-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167070>

RIGHT:

# 星の文藝欄

## 流星と天狗

(これは考證的な雜文です。)

稻垣武五

天狗などと言ふ天文學とは凡そ縁のないやうな怪物を持出すが、それが流星と關係してゐる所を天文横道戯語として少し書く。

今時天狗の存在を肯定する者はないが、山伏姿で口は尖り鼻高く翅があり、團扇を持つて翔け歩く——これが文獻、傳説、口碑等に現はれる代表的な「天狗様」の形相である。また鞍馬で牛若丸の劍術の稽古臺になつた貧弱なものもある。が、天狗の原始的形態(?)はこんな立派なものではなかつた。

發生地たる支那の「史記」「晉書」「漢書天文志」その他から拾つてみる。まづ、「流星有<sub>レ</sub>光見<sub>レ</sub>人面<sub>→</sub>、墜有<sub>レ</sub>聲、若有<sub>レ</sub>足曰<sub>二</sub>天狗<sub>一</sub>……………」<sup>1</sup>「西北有<sub>二</sub>三大星<sub>→</sub>、名曰<sub>二</sub>天狗<sub>一</sub>、天狗出則人相食<sub>→</sub>」<sup>2</sup>「星出、其狀赤白有<sub>レ</sub>光、下野爲<sub>二</sub>天狗<sub>一</sub>」などによると天狗は流星又は星であつて、「天狗狀如<sub>二</sub>大奔星<sub>→</sub>、有<sub>レ</sub>聲、其下止<sub>レ</sub>地類<sub>二</sub>狗<sub>一</sub>」<sup>3</sup>「天狗狀如<sub>二</sub>大流星<sub>→</sub>、色黃有<sub>レ</sub>聲……………」<sup>4</sup>「天狗如<sub>二</sub>大流星<sub>→</sub>、有<sub>レ</sub>聲、見則破<sub>レ</sub>軍殺<sub>レ</sub>將<sub>→</sub>」などに依れば天狗は流星に似てゐるのであつて、皆音聲を發してゐる。何れにしてもその様子は一寸人間面をした狗の様で、頭は尖り、喙があるそふだ。これは日本の木葉天狗に似てゐるが、これが出ると大抵は「破<sub>レ</sub>軍殺<sub>レ</sub>將<sub>→</sub>」とありすさまじい描寫がしてある。ひどいものになると、「天門山有<sub>二</sub>赤犬<sub>一</sub>名曰<sub>二</sub>天狗<sub>一</sub>、其光飛<sub>レ</sub>天流而爲<sub>二</sub>星<sub>一</sub>、其聲如<sub>二</sub>雷<sub>一</sub>」又は、「流而爲<sub>二</sub>星長數十丈<sub>一</sub>」なんて天狗の流星化もあるし、「太白星散爲<sub>二</sub>天狗<sub>一</sub>」<sup>5</sup>といふ惡戯けた(?)のものもある。

次に日本では、猿田彦命が天狗の姿をしてゐられるが、これは後世になつてその姿を天狗化されたのであつて、吾國最古の記録は今から凡そ一三九〇年前舒明帝の御代の「九年二月戊寅、大星從<sub>二</sub>東落<sub>一</sub>西、便有<sub>レ</sub>聲似<sub>二</sub>雷<sub>一</sub>、時人曰<sub>二</sub>流星之音<sub>一</sub>、亦曰<sub>二</sub>地雷<sub>一</sub>、於是僧旻曰、非<sub>二</sub>流星<sub>一</sub>是天狗也、其吠聲似<sub>二</sub>雷<sub>一</sub>」

耳<sup>ニ</sup>である。果してこの年に東夷の亂が起り、征討に赴いた上毛野君形名は敗れたが、その妻女が女軍によつて東夷を破つたさうだ、これを豫言した僧<sup>ボンノ</sup>髪は舒明帝四年に渡來した支那坊主で、「時人曰<sup>ホウシ</sup>流星之音<sup>ニ</sup>」にも拘らず支那式に天狗であると言つた。こゝに日本へも天狗なる怪物が輸入された譯である。尤も日本では初め天狗を阿麻都伎都禰<sup>アマツキツネ</sup>と訓じさせてゐて、こゝに天狗と狐との交渉もあるのである。

天狗が東洋殊に支那、日本にだけあるのは佛教との關聯に於いて説く必要があるが、何れにしても古代人が流星を怪物の飛<sup>ト</sup>天としたのや、妖怪と無氣味な流星を關聯させたのは尤ものことである。またそれは災害、惡事の豫言者でもあつた。

日本ではその後、天狗は流星と關係を絶つて、鎌倉及び室町時代から漸次に、日本獨特の形態に於て傳説化されて居つた。即ち吾々が幼時に聞かされた謂ゆる「天狗様」傳説は流星とは毫も關係なく、また支那古書のそれとは同名異物になつてゐる。例へば、山伏姿で高鼻といふ恰好は狩野元信の畫筆になつたものらしいとのことである。この外の興味多い天狗漫筆は天文學と無關係なる故に省く。

—— 以上 ——

## 詩 (Poem) 二篇

稻垣武五

### 星 圖

ソコデハ神話ノ英雄ヤ動物達ハ

化學構造式ニ似タ骨骼ヲシテキル

.....

徽ノヤウナ色々ノ符號ヲ暗誦スルト

等隔ノ經緯線ハ硝子窓ノ枠ニナル

.....

赤イ印刷ハ麻疹ノ見舞文デハナイ